

20世紀末

空から恐怖大王が降ってきて「愛」が滅ぼされた。
21世紀初年「真実の愛」が大ヒット。
「愛」の形は「真実の愛」へと変化した。

20XX年

多くの人たちが「真実の愛」を求めようになり、
「真愛道」と言う「真実の愛」を求める文化が
広く普及されるようになった。

「あう、あんっ♡ああう、あう、あんっ♡
奥に、当たって……あう、ああんっ♡」

「……！」

目の前で一組の男女が交わっている。
放課後の教室で、オレのすぐ目の前で

「はあはあ……どうだ、彼氏と目を合わせながら
と……のは……」

「気持ちうっ、いい……あう、あんっ♡」

「ああう、これ、奥に当たって♡」

「恥ずかしいのに……あう、あう、あんっ♡」

「まれ……！」



歯を食いしばって目の前の光景を見続ける。
オレはこの姿を……声を、匂いを、
全て記憶に焼き付けなくてはいけない。
そのために決意したのだから……





前日の放課後

学生のであるオレ「おお」は3人で喫茶店に来ていた。



「祝・恋人化！
おめでとぅ〜♪」

目の前の女が大きな声で騒いでいる。
テンションの高さについていけない。

彼女は「そらの」オレの幼馴染で無駄に明るい。
家も隣同士で腐れ縁とも言える。
オレはそらと呼んでいる。



「ありがとう、そらのちゃん」

隣に座っている娘が律儀に返事をする。
彼女は「まれ」オレの恋人になったクラスメイトだ。
そらが言った通り今日から恋人になったのだ。

恋愛の授業でデートをした際に仲良くなり、
同じ趣味で部活でも話すようになり、
3年経った今日である。



「いや恋人化って何だよ」

「別にいいじゃん、呼び方何で何でもさ
それで二人はどっするの？」

「うん、真愛道に入門してきたよ。」

「おお君とは真剣に付き合っつもりだから」

「ああ、オレもだ」

「へへ、そうなんだ」

「そらのちゃんは恋人を作らないの？」

「ウチはまだいいかな。部活の方頑張りたいし」



「って、そろそろ部活の時間だ。
いなくなっちゃ」

「頑張ってね」

「うん、そっちもほどほどにね」

そう言つとそらはお金を置いて喫茶店から
出ていった。慌てるので、時間ギリギリなのだろう。



「相変わらず賑やかな奴だな」


「もう、お祝いしてくれたんだから
感謝しなきゃ駄目だよ？」

「そうしてもからかわれるだけだしな……」

そう言いながらまれの好感度を見てみる。
相変わらずオレに対する好感度は高い。

82





好感度が見えるようになった……
これが原因で過去の愛は減びたらしい。
それまでの愛は見えないからこそ
価値があったのだぞうだ。

おかげで離婚や婚約破棄が多数発生して
出生率が異常に低下したらしい。
今もそれほど上がってないので、
20世紀から授業の内容はかなり変化したようだ。
産まれたときから好感度が見えてる
オレ達の世代にはよくわからないが。

「それよりも真愛道の方を考えようぜ。
入門書貰ったたる」

「うん、これよね」



真実の愛とは

愛を磨き、鍛え上げることで到達できる強く美しい愛です。
どのような状態でも互いに愛し続けることが出来る強い心の繋がりを持っています。
映画「真実の愛」では一切肉体的な接触がなくても愛し合い続ける強さが描かれました。

真愛道とは

真実の愛にたどり着くための道です。愛の力「愛力」を鍛えます。
「愛磨かざれば光なし」
真実の愛にたどり着くためには錬磨、修練を積む必要があります。

「艱難汝を玉にす」

人は困難や苦勞を乗り越えることによって、初めて立派な人間に成長します。
真実の愛にたどり着くために困難で苦しいことこそ逃げずに立ち向かいましょう。

愛の鍛え方

「初めは」筋肉と似ています。愛に負荷をかける「鍛錬」を行った後、栄養を与えて休ませる「回復」行います。
それを繰り返すことで強くなります。
「鍛錬」は筋肉と同じように愛にダメージを与えます。つまり好感度が下がるような行為を行います。
段位ごとの具体的な鍛錬方法は以下のようになっています。

入門の鍛錬

寝取らせを行います。二人で話し合っ相手や期間、回復のタイミングを決めましょう。
睡眠を明けすぎると効果がなくなります、短すぎても回復が間に合いません。
睡眠を明けすぎると効果がなくなります、短すぎても回復が間に合いません。
睡眠を明けすぎると効果がなくなります、短すぎても回復が間に合いません。

「入門だから、寝取らせだよな」

「うん、でも実際に考えるよ……」

真愛道は有名で、ある程度の事は入門前から知っている。

真愛道は厳しい道のりで、非常にきつく苦しい。それだけ「真実の愛」は手に入れるのが難しく、価値の高いものだ。

「……抵抗感や嫌悪感を感じるよな……」

オシの言葉にまれも頷く。

だが、書いてある文章を読んで納得はしている。

「艱難汝を玉にす……か」

「辛く厳しいからこそ乗り越えたときに成長できるってことよね」

「嫌だと感じるからこそ負荷がかかる……」

「ああ、「愛磨かざれば光なし」ってことだな」

辛いからって逃げたら成長できない。

運動も勉強もきついが、頑張らな

成長しないものだ。

人も愛も同じだ。オシとまれの愛はまだ産まれたばかりの赤ちゃんと同じなのだから。

入門の鍛錬

寝取らせを行います。二人で話し合って相手や期間、回復のタイミングを決めま

寝取らせを行います。二人で話し合って相手や期間、回復のタイミングを決めま

寝取らせを行います。二人で話し合って相手や期間、回復のタイミングを決めま

寝取らせを行います。二人で話し合って相手や期間、回復のタイミングを決めま

寝取らせを行います。二人で話し合って相手や期間、回復のタイミングを決めま

寝取らせを行います。二人で話し合って相手や期間、回復のタイミングを決めま

寝取らせを行います。二人で話し合って相手や期間、回復のタイミングを決めま

寝取らせを行います。二人で話し合って相手や期間、回復のタイミングを決めま

寝取らせを行います。二人で話し合って相手や期間、回復のタイミングを決めま

寝取らせを行います。二人で話し合って相手や期間、回復のタイミングを決めま

寝取らせを行います。二人で話し合って相手や期間、回復のタイミングを決めま

寝取らせを行います。二人で話し合って相手や期間、回復のタイミングを決めま

寝取らせを行います。二人で話し合って相手や期間、回復のタイミングを決めま

寝取らせを行います。二人で話し合って相手や期間、回復のタイミングを決めま

寝取らせを行います。二人で話し合って相手や期間、回復のタイミングを決めま

寝取らせを行います。二人で話し合って相手や期間、回復のタイミングを決めま

寝取らせを行います。二人で話し合って相手や期間、回復のタイミングを決めま

寝取らせを行います。二人で話し合って相手や期間、回復のタイミングを決めま

寝取らせを行います。二人で話し合って相手や期間、回復のタイミングを決めま

寝取らせを行います。二人で話し合って相手や期間、回復のタイミングを決めま

真実の愛とは

愛を磨き、鍛え上げることで到達でき
どのような状態でも互いに愛し続け
映画「真実の愛」では一切肉体的な接

真愛道とは

真実の愛にたどり着くための道です
「愛磨かざれば光なし」
真実の愛にたどり着くためには
「艱難汝を玉にす」
人は困難や苦勞を乗り越えること
真実の愛にたどり着くために困

愛の鍛え方

「初めは」筋肉と似ています。愛に
それを繰り返すことで強くなり
「鍛錬」は筋肉と同じように愛に
段位ごとの具体的な鍛錬方法は以下の

入門の鍛錬

寝取らせを行います。二人で話し合
寝取らせを空けすぎると効果が
相手に寝取らせを行うのがおすすめです。

かといって誰でもないわけではない。
最初の方は寝取らせる相手への好感度が高めの相手
良いらしい。
本気で寝取るうとじてくれる相手と言うことだ。

「うちの学園は真愛道の鍛錬を推奨してるから、
学園の学生や教師なら断られることは
そうないだろうけど。」

入門書をパラパラとみて鍛錬の注意事項や
心構え等読んでいく。

「そうするとどっちが誰を寝取らせるかだよな……」

オレはまれのことをしっかり見て頷いた。
どうやらまれもやる気は十分らしい。

「うん、だから頑張ろうね。」

「真愛道の鍛錬は辛いつて聞くが、
だからこそ人間的に成長できるって話した」

まれを他の男に抱かせる。

真実の愛とは

愛を磨き、鍛え上げることで到達できる強く美しい愛です。
どのような状態でも互いに愛し続けることが出来る強い心の繋がりを持っています。
映画「真実の愛」では一切肉体的な接触がなくても愛し合い続ける強さが描かれました。

真愛道とは

真実の愛にたどり着くための道です。愛の力「愛力」を鍛えます。
「愛磨かざれば光なし」
真実の愛にたどり着くためには錬磨、修練を積む必要があります。

「艱難汝を玉にす」

人は困難や苦勞を乗り越えることによって、初めて立派な人間に成長します。
真実の愛にたどり着くために困難で苦しいことこそ逃げずに立ち向かいましょう。

愛の鍛え方

「初めは」筋肉と似ています。愛に負荷をかける「鍛錬」を行った後、栄養を与えて休ませる「回復」行います。
それを繰り返すことで強くなります。
「鍛錬」は筋肉と同じように愛にダメージを与えます。つまり好感度が下がるような行為を行います。
段位ごとの具体的な鍛錬方法は以下のようになっています。

入門の鍛錬

寝取らせを行います。二人で話し合っ相手や期間、回復のタイミングを決めましょう。
睡眠を奪いすぎると効果がなくなります、短すぎても回復が間に合いません。
必ず睡眠を奪取らせを行うのがおすすめです。

「オレが先に寝取らせをするよ。
相手は明日までに考えておく」

「うん、わかった」









「なるほどな」

入門書をしっかりと読んで
どんな相手がいいか確かめた。

好感度が高い相手が良いが、
負荷がかかることが重要なのでそこまで相手に
こだわる必要はないらしい。

あと独占欲が弱いとこの鍛錬は向かないようだ。

(友達にまれを寝取るせると考える……か)

頭の中でしっかりと思い浮かべて考えてみる。

「うんす」「イラつくな」

何らかの不快の気持ちになるのなら独占欲はある
と言っことらしい。鍛錬には問題ないはずだ。

きつい方が負荷がかかるからいいんだよな……
でも最初から負荷が強すぎると回復しない
可能性もあるし、友達はやめておこう。

クラスメイトであまり話さない相手で考えてみる。
うちの学園は留学生が多い。

だから国外の相手から考えるのもいいかもしれない。

そこまで考えたところで窓にノックする音が聞こえた。

「よう、お邪魔します」

「そら……お前なあ……」

そらの家は隣で屋根伝いで「」の部屋まで来れる。
だから昔からよく遊びに来ていた。

「漫画の続き読みに来たただだから、
気にしないでいいよ」

「気にするわ！
てかオレ恋人出来ただけど？」

「別にいいじゃん？真実の愛目指してるんだからさ」

「それはそうだけど……」

「あつたあつた」

本棚を漁ると勝手に本を取ってベッドに寝転がって
漫画を見始めた。いつもの事で咎める気も失せる。



足をパタパタとさせながら我が物顔だ。
困った奴だ。下着が見えないかどうか
確認しておいてやらないとな、うん。

「はあ……いいや、
それよりちよつと相談があるんだが……」

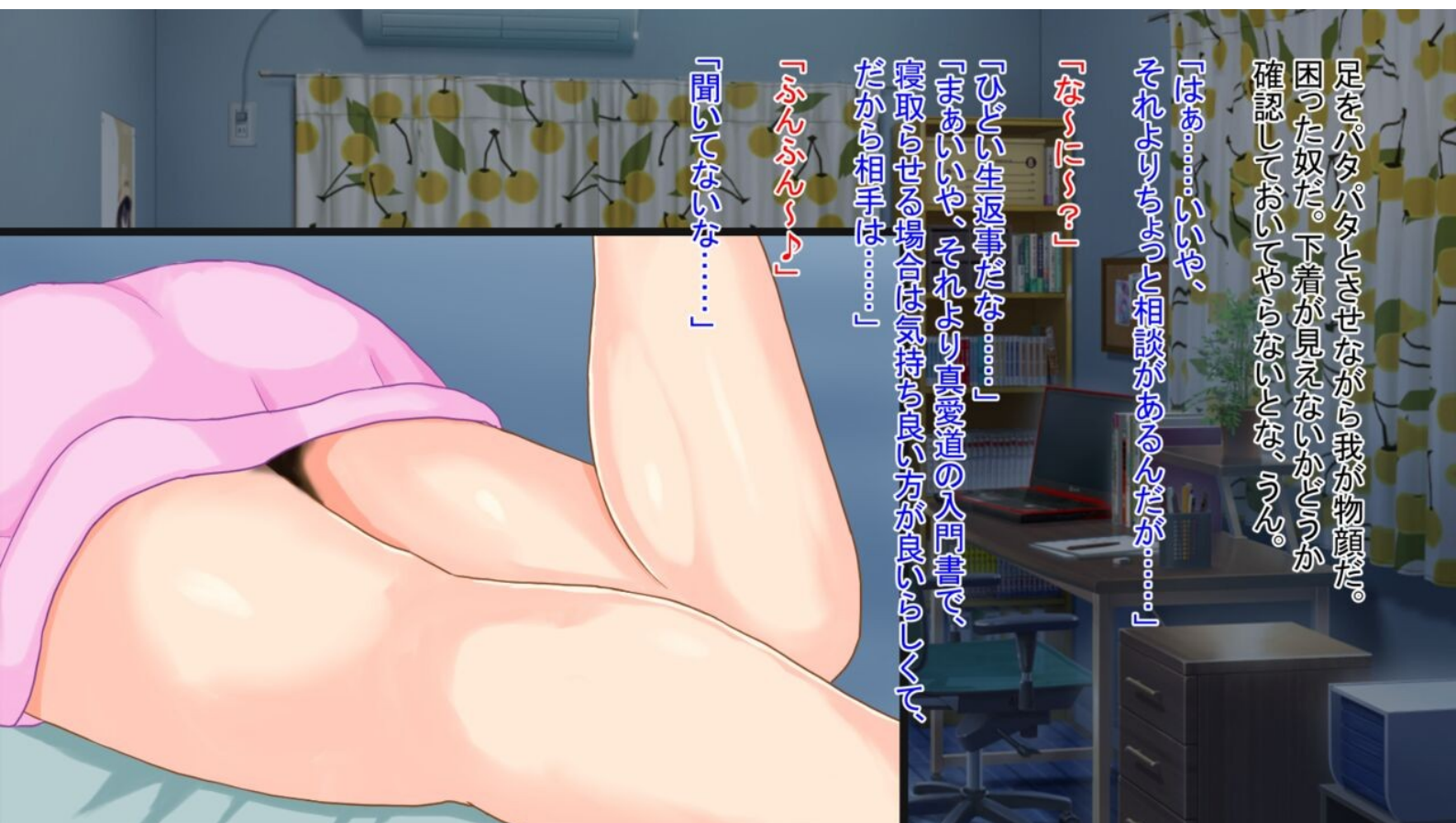
「な〜に〜?」

「ひどい生返事だな……」

「まあいいや、それより真愛道の入門書で、
寝取るせる場合は気持ち良い方が良いらしくて、
だから相手は……」

「ふんふん〜」

「聞いてないな……」



そらのの好感度を見てみると結構高い」とがわかる。
とは言え「いつは誰に対しても結構高い」。
他人の好感度も気にしてないように見える。

そう言えばそらと同じ部活の奴が居た。
体格のいい奴だったし、そいつに頼んでみるのも
いいかもしれない。

しかしまれを寝取らせると考えると……
何とも説明しづらいが、とにかく不快な気分になる。

「あはははっーなにそれっ、」

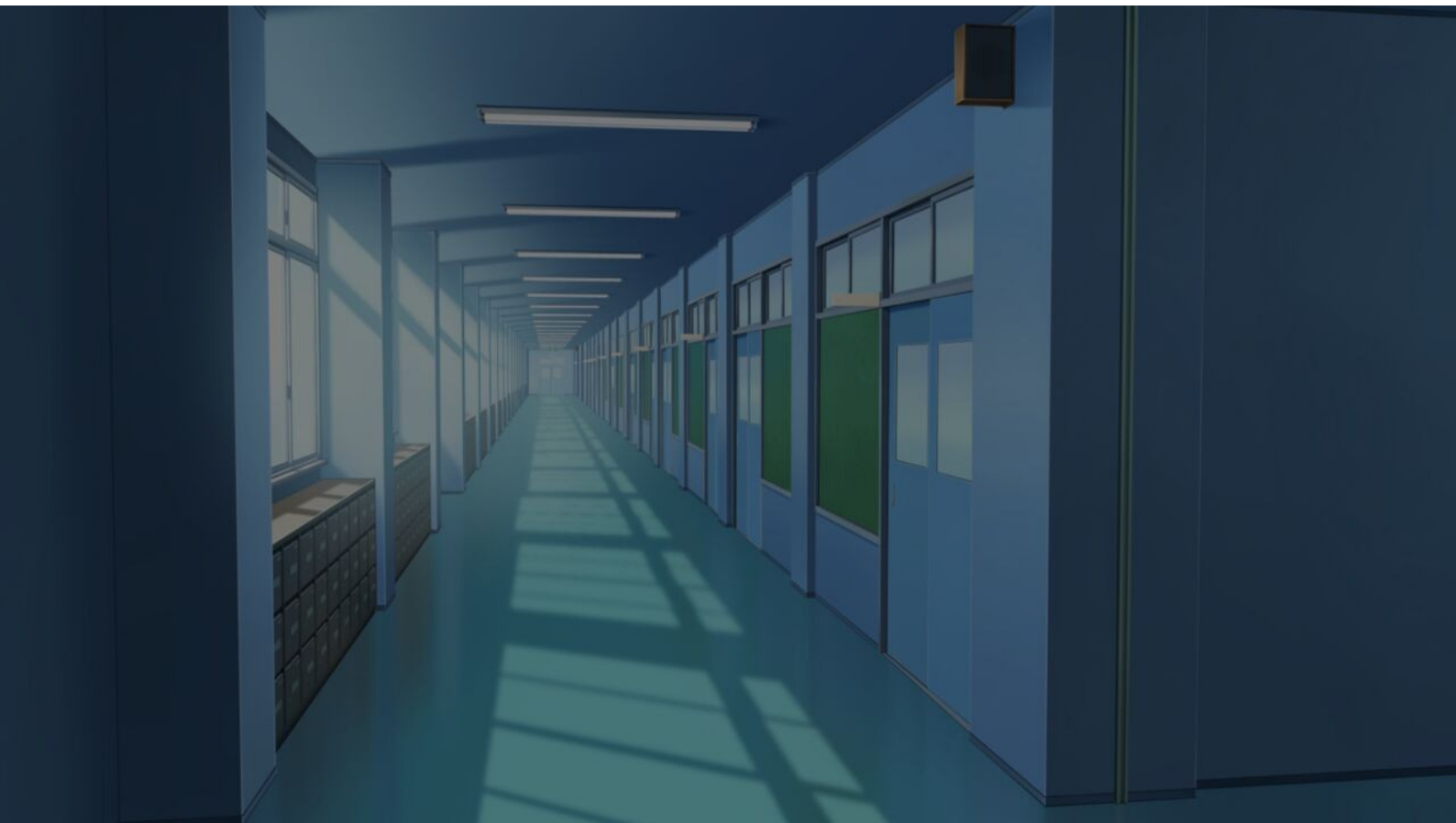
「……」





まれとクラスマイトの男に連絡をして、
明日の放課後に時間が取れることになった。

そして翌日の放課後……



「……」「はやるのよは」

「緊張しているのか……別の機会にするか？」



「ううん、真実の愛のためだもん」

「それに辛いからって鍛錬から逃げてたら、立派な大人になれないでしょ」

「若いうちの苦労は買ってでもしろって言うしね」

「そうだな。わかった、行」

「うん」

教室に入ると甘い匂いが漂っていた。アロマだろうか。そこには背筋を伸ばした男が立っていた。

「来たか。時間通りだな」

「ああ、今日はよろしくな、ヴァン」

ヴァンは留学生だ。真面目な性格をしていて、何事にも真剣に取り組んでいる。真愛道についての話しをしているのも聞いたことがある。

61

まれへの好感度を見てみると、十分な高さだ。

「よろしくお願いします」

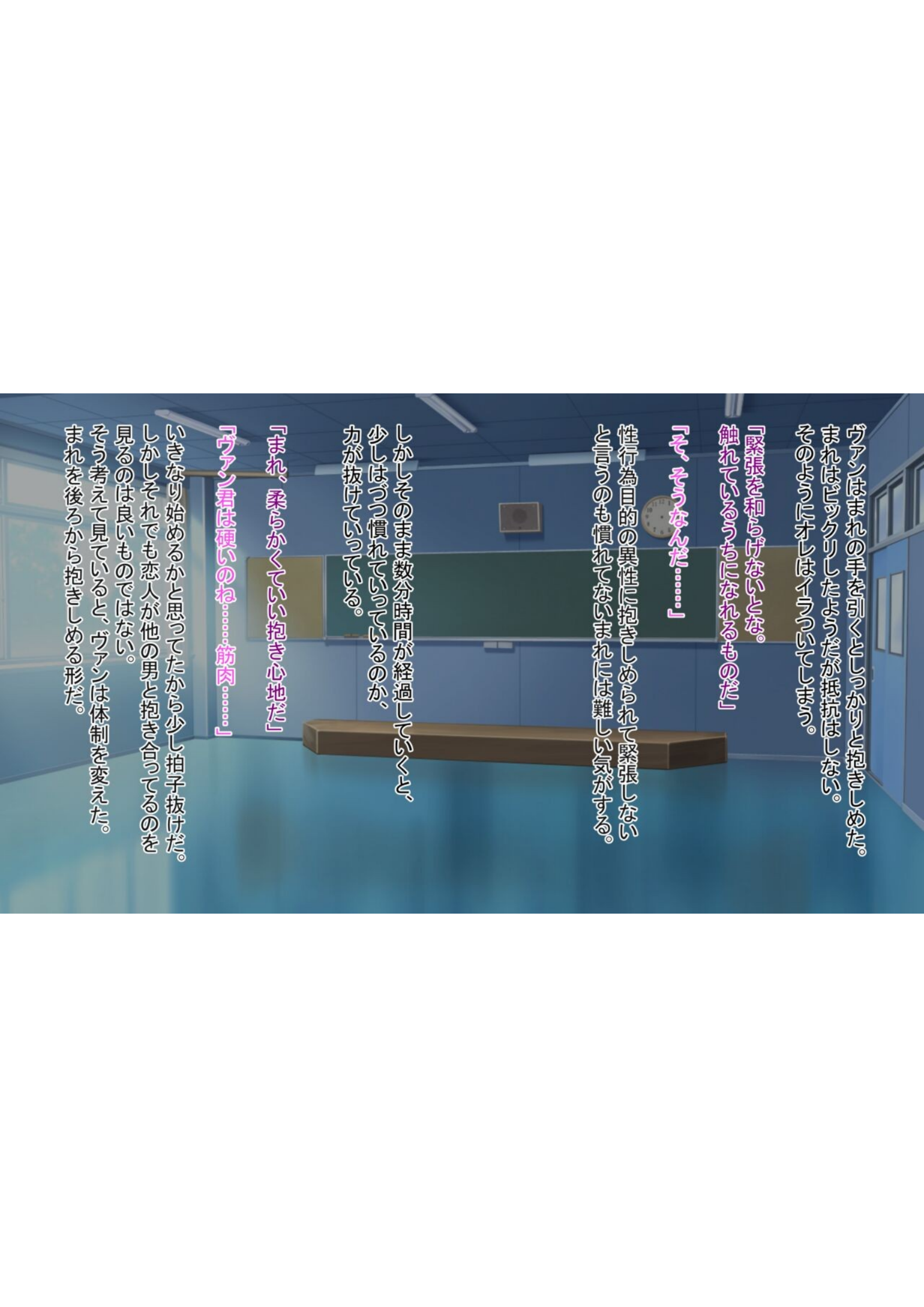
「二人ともよろしく。
そして私は全力で寝取るつもりだ。
いいな？」

「ああ、寝取らせは本気で寝取ってくれる相手が良い
とあったからな」

「まね、それじゃあ「うち」」

「あ……」





ヴァンはまれの手を引くとしっかりと抱きしめた。まれはビックリしたようだが抵抗はしない。そのようにオレはイラついてしまう。

「緊張を和らげないとな。触れているうちになれるものだ」

「そ、そうなんだ……」

性行為目的の異性に抱きしめられて緊張しないと言ったのも慣れてないまれには難しい気がする。

しかしそのまま数分時間が経過していくと、少しはづつ慣れていっているのか、力が抜けていっている。

「まれ、柔らかくていい抱き心地だ」

「ヴァン君は硬いのね……筋肉……」

いきなり始めるかと思ってたから少し拍子抜けだ。しかしそれでも恋人が他の男と抱き合っているのを見るのは良いものではない。そう考えて見ていると、ヴァンは体制を変えた。まれを後ろから抱きしめる形だ。

「んっ、んんっ!」

「!」



ヴァンは「ちらに見せつけるように
まれとキスをした。

いや、実際見せつけているのだから。
そのための寝取らせなのだから。

くそっ……オしもまだキスをしたことがないのに……

でも悔しいものは悔しい。

まれも嫌でも受け入れると決めているのだから、
恋人としてしっかり見ないといけないのは
わかっているのだが……

「あ……」

「柔らかくていい感触だ」

ヴァンの手がまれの胸を揉み始めた。

「やっ……んあの……」

「恥ずかしい」「ほらないよ、
まれの体はすくくいいからな」



「おお君にも見られて……うっ」

「寝取られ何だから、こっなる」とは
覚悟してきたんだろ？ だったら抵抗するな」

「そっ……だよ……」

嫌悪感からか硬くなっていたまれだったが、
ヴァンの言葉に少し力を抜いた。

「お前にみられるのが恥ずかしいのか？」

「恥ずかしい……それに、見られたくないって気持ちもあって……」

ヴァンはその言葉に少し考え込んでいた。そして考えがまとまったのか、一っ頷いた。

「まれ、集中できていないか？」

「えっ……」



「勉強でも運動でも言えるが、

集中して取り込まないと高い効果は見込めない」

「真愛道も恥ずかしいからと集中されないのは困る。私の時間もとられているんだ」

「……」

「集中できないのは今日はやめにしよう」

「おい、それは……」

ヴァンの言葉に声を上げたが、
ヴァンの様子が真剣だと気づき、息をのんだ。

「寝取らせの鍛錬で大事なことを知っているか？」

「う、うん……見る側は目を逸らさないで
しっかり見る」とで……」

「交わる方は性欲を満たすように交わって
相手を好きになる」と……よね？」

「そうだ。気持ちが良い性行為は愛情ホルモンなどの
様々なホルモンが溢れて好感度が上がる」

「そして他者への好感度が上がる」とで
恋人への好感度が下がる」ことが多い」

「それに、性欲に任せた姿を見せないと見る側には
大した負荷にならない」

「だから寝取らせられる側は気持ちいい性行為を
行うように集中するべきだ。

なのにまれの態度はそうではないね」

「」

「辛いからと手を抜いた筋トレをしても体は鍛えられない。それは愛も同じ」とだと習った」

「もし集中できないなら今日はやめにしよう。双方にとって時間の無駄にしかない」

「……」

ヴァンの言葉は正論だ

真愛道では愛を鍛えるために一度相手のへの好感度が下がるくらい愛に負荷をかけなければならぬ。

筋肉と同じだ。そこから回復することだ。

今までよりもより強い愛へと鍛えられるのだ。

なのにまれもオレも好感度が下がることを恐れて手を抜いた寝取らせをしようとしてしまっている……。

これではだめだ。今までの愛が壊れる可能性を恐れて好感度が下がるようなことを行わないのでは真実の愛は手に入らない。

オレ達は真実の愛を手に入れたいのだ。

簡単に壊れる愛を守りたいなんて思っていない。

「まれもそう思ったのか、「ちろ」と目が合うと
真剣な表情で頷いた。」

「ごめんね、ヴァン君わたしは初めての緊張や
恥ずかしさで集中できてなかった」
「でも頑張るから、「のまま続けさせて」

「わかった。でも集中できてないと思ったら
今日はそれでやめるからな」

「うん、わかった」



ヴァンは再びまれの胸を掴むと優しく揉み始めた。
まれもヴァンの股間に手を置くと、さわさわと
撫で始めた。

「硬くなってる……」

「まれの体を触っていたから当然だ」

「ヴァン君の体はほんと硬いんだけ、
腹筋もしっかりしてて……」



帰宅部のオレと違ってヴァンは運動系の部活な上に
とても真面目な性格で鍛えている。
体格がいいわけではないが、筋肉はついてそうだ。

逞しい男の方が好きな女は多いのでは……

そんなことを考えていると、
ヴァンの手がまれの股間に伸びた。

「あっ……ヴァン君……」

「しっかり感じていたようだな。
素直な体で嬉しいぞ」

「う、うん、ヴァン君と気持ちよくなりたいから……」

「ああ、「のち〇ぽがまれの」に入らんだぞ」

そう言つたヴァンは、 penis を露出させまれのに握らせた。
まれば躊躇しながらもゆっくり触っている。



「わっ……おっきい……」

「こんなのが入るんだ……」

「すっ……脈打ってる……」

「愛撫は時間をかけてしっかり
行くと満足度が高くなる
だから時間をかけるぞ」
「気持ちいいところを教えて
くれ、ちゃんと覚える」

「うん、わかった……」



そうしてウマンとまれはキスをしながら愛撫に
没頭し始めた。

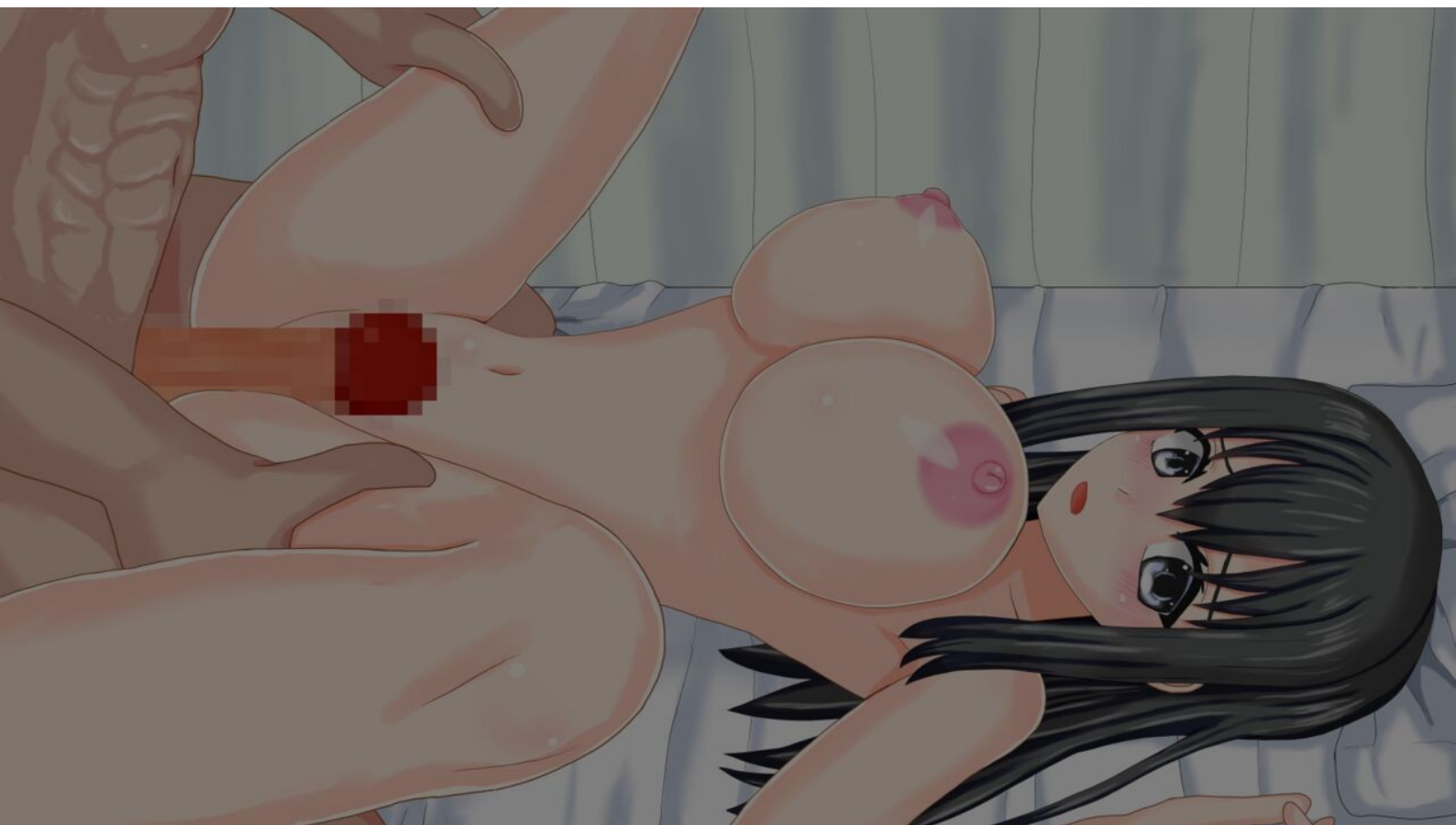


二人のまじりあう音だけが部屋の中で
響き続けた。









「はあはあ……」

一時間もの間二人は愛撫し合っていた。そのせいですっかりと体が出来上がっているようだ。全裸で恥ずかしいと言う気持ちも、抑え込んでいる。

「この準備は万端だな。そろそろ挿入れるぞ」

「うん……あお君……」

まれの言葉に目を合わせる。ずっと二人の行為を見ていたせいでストレスがたまっているが、それを表に出さないように気を付ける。



「わたしの処女……初めてをヴァン君に捧げるね」

「目を閉じたり耳を塞いだりしないで、しっかり目に焼き付けてね」

「真実の愛のために……」

「……わかってる。」

「逃げずに受け止めるよ」


「うん、信じてる」

大事な恋人の処女が間男に奪われる。そのことを想像するだけで吐き気がする。しかし、その苦しさが愛の鍛錬なのだ。記憶に刻みこまなければならぬ。

「準備は良いか？」

「……(コクッ)」





ヴァンのペニスがまれの膣内へと埋まっていく。
時間をかけて愛撫されていたからなのか、
そこまで抵抗は強くなさそうだ。

「んっ……！」

「一気に行くぞ」

「うん、わかった……」

まれが頷くとすぐにヴァンの腰が突き出された。
それと同時にまれの苦しい声が漏れ聞こえた。

「んっ……はあ……はあ……」

「大丈夫か？血がでてているが」

「はあ……うん、
痛みはあんまりないかも」

「！」

まれの秘所から血が出てるのが見えた。
処女をヴァンが奪ったのだ。

その事実に関頭が熱くなって何も考えられなくなりそうだ。

「ふう……」

しかしここで爆発してはいけない。
オレはこの出来事を記憶に刻み込むのだ。

そうでなければ、まれの頑張りが無駄になる。



「おお君……わたしの処女ヴァン君に捧げたよ……」

「ああ、ちゃんと見てたぞ
よく頑張ったな」

何とか声が震えなかったようだ。
怒りでおかしくなりそうだが我慢できてるらしい。

しかし話しているとボロがでるかもしれない。
ヴァンに続けるように促した。

「まれの膣はすごく締め付けてきて気持ちが良いな」

「そ、そう？ヴァン君気持ちいいんだ」

「ああ、すごくいい。

まれば顔も体も綺麗だし体も気持ちいい」

「すごくいいな。より好きになった」

「……………（かああああ）」



その言葉に二人の好感度を見てみる。

68

71

まれも事前に確認していたが、二人の好感度は高くなっているようだ。ホルモンの関係もあり性行為では好感度が上がりやすいと言っていたが、複雑な気分だ。と言うよりも、すごく嫌な気分だ。嫉妬だろう。





「初めてち○ぽを入られた感想はどうだ？」

「感想って言われても……あんまり痛くはないけど、

圧迫感があるって言うか」

「その、少し苦しいかも？」

「それと熱くて変な感じも……」

「まだ動かないから集中してち○ぽを感じてみるんだ。さっき散々弄って確かめただろ？」

「集中して、入ってるモノの感触を……」

「……………」

「まれば言われた通り集中しているようだ。間男のペニスを感じることに……」



「どんな形とか、硬さとか思い出すんだ。
今まれが感じてるち○ぽはオレのち○ぽだ」

「……うん、アレがわたしの中に入ると
こんな感触を感じるのね……」

「あと、痛みがないなら力を入れて締め付けてみたり
膣を揺らしたりしてみんなだ」

「そうすればもつち○ぽがわかるようになる」

「うん、やってみる」

「ん……ふう……んんっ……」

まれは素直にヴァンの言うことを聞いて動いている。
そうしないと鍛錬にならないことはわかっているが、
嫉妬心を抑えられない。

いや、抑えるのは鍛錬としては適当ではない。
嫉妬心はどんどん強めるべきはずだ。
苦しければ苦しいほど、それを乗り越えた際に
強い愛が手に入るのだから。

「うん、何だか色々力を入れてみると形とかわかるかも……」

「だろう？しばらくの間じっくり堪能して……ぞ」

「でも、「う言っのってすぐに動くんじや……」

「きやつ」

ヴァンがまれに覆いかぶさるように抱き着いた。それに驚いたまれの唇をヴァンが一瞬だけ塞ぐ。

「オしのち○ぽが馴染むまでイチヤイチヤしよう」

「えっと、さっきみたいに？」

「ああ、準備は丹念に行った方が気持ちよくなれるからな」

「そうなん……んんっ！」



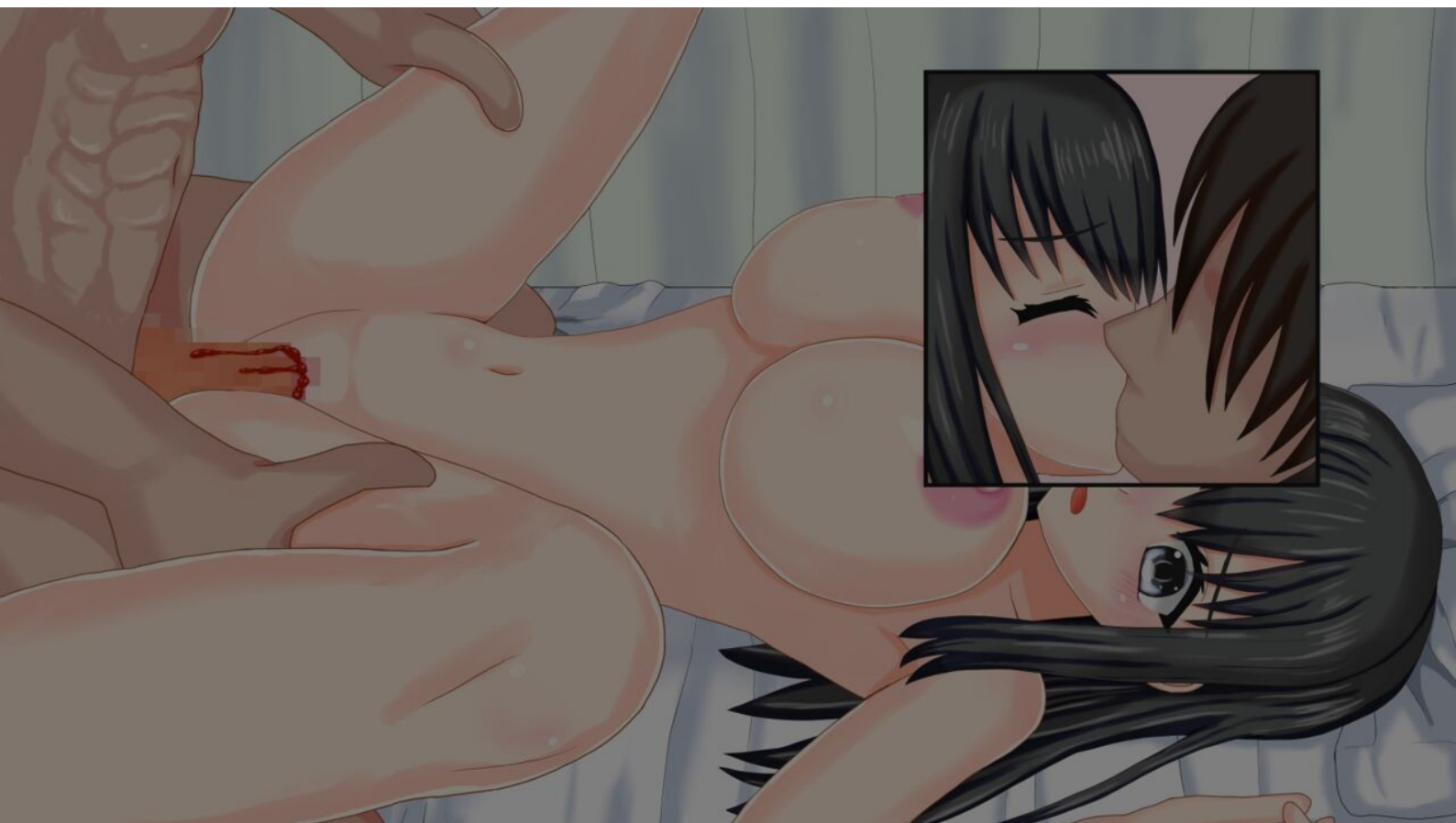
ヴァンがまれに再び口付けをし、
そこから二人の愛撫が再び始まった。

キスをしたり胸を揉んだり乳首を吸ったり
耳を舐めたり愛を囁いたり。
腰はほとんど動かさずにまれがどンドン
興奮していくのが見て取れる。

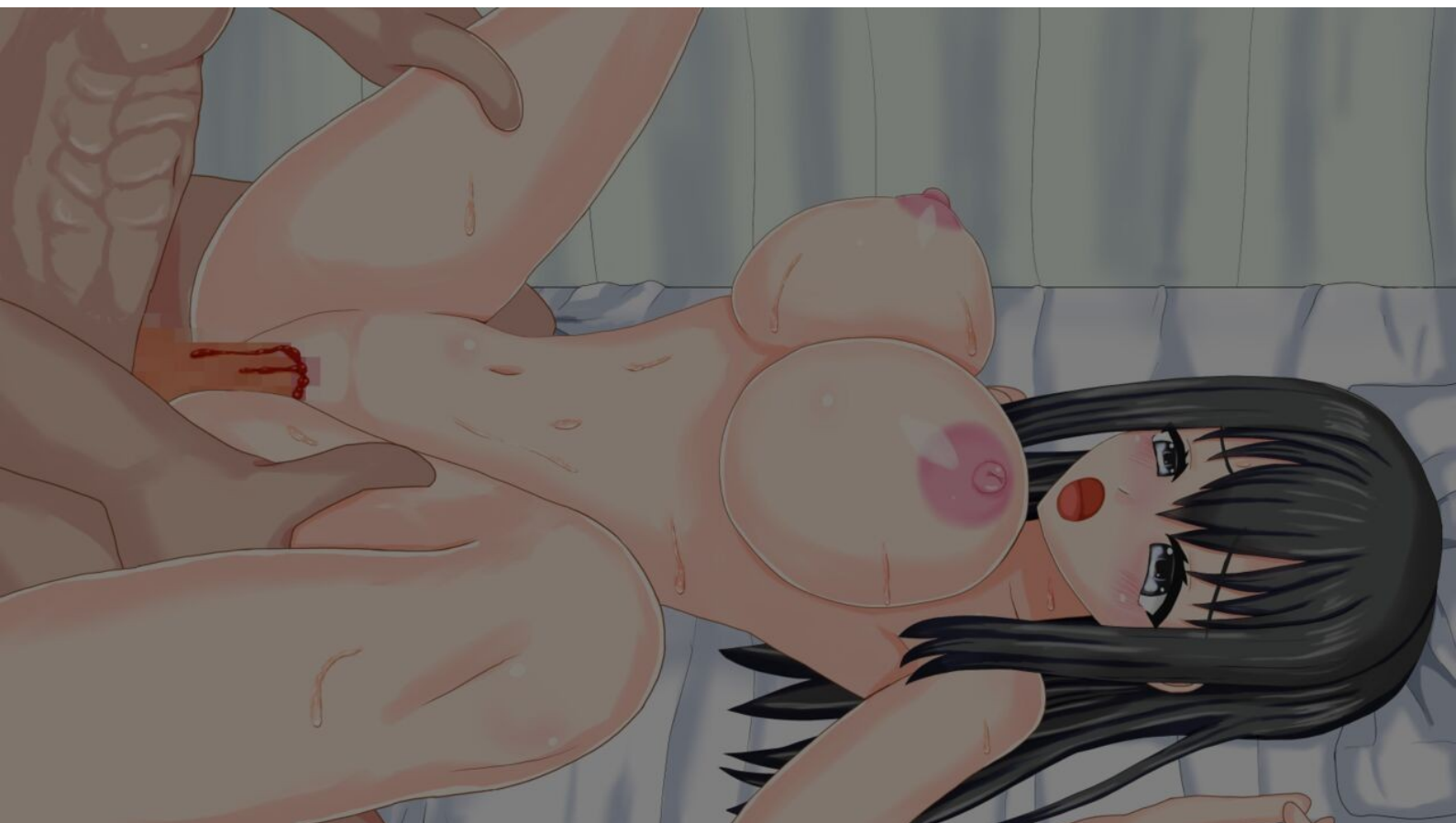
「ちゅっ……んっ、んんっ……」

「んんっ……あっ、あっ、あんっ……!!」









「はあ……はあ……」

たつぷりと30分ほども続いただろうか。まればすっかりと蕩けた表情になった。

途中からかなり感じている状態になっていたが、絶頂しないように強弱をつけて愛撫をしていたように見える。

「そろそろいいか」

「はあ……はあ……そろそろっ？」

「ああ、しつかりち○ぽが馴染んだらろ？」

「……うん、違和感は少ないけど……」

「じゃあ、始めるぞ」



「あっ……ふあっ!?」

ヴァンが腰を動かして抽送を開始した。それほど早い動きではない。

しかしまれの身体は強く反応している。

「えっ……あっ、ふあっ、あっ……ああんっ!」

「気持ちよさそうだな。よかった」

「何で……? あっ、あんっ。初めてで気持ちよくなるのは珍しいって……あっ!」

「しっかりと愛撫に時間をかけて、ち○ぽも馴染ませたからだ」

「奥に入れたまま馴染ませたから、苦しくないだろ?」

「う、うん……んっ、んまっ……声、でちゃう……あっ!」

「まれ……」

「ああ君……んっあんっ♡」



はつきりと感じるとわかる喘ぎ声が聞こえてきた。その声にまれ自身驚いているようだ。他の男に感じさせられているのはショックだ。だが、オレがなすべきことは……

「ヴァンと楽しんでセックスしてくれ。気持ちよくなって欲しい」

「おお君……んっ、うん……んんっ♡」

寝取らせられる側の役目は本気で気持ちのいい性行為を行うことだ。気兼ねなく交われるように応援することこそが寝取らせる側の役割だ。

「まれのま〇〇はすごく気持ちいいな。ち〇ぼに吸い付くようだぞ」

「そ、そうなの……あぁっ……んっ」

「ヴァン君、すごくなれてるね……」

「あっ……過去に恋人がいたの……?」

「いや、そう言うわけじゃない。

真愛道のために教師に教えて貰ったんだ」

「教えて貰ったって……えっちをしたの?」

「ああ。さっき言っただろう。気持ちのいい性行為は

ホルモンの影響で好感度が上がりやすいと」

「だから性行為の練習を何度もしてもらった。

恋人が出来ないことには真愛道に入門できないからな」

「そうなんだ……先生と……あっ、んっ♡」

「それにパートナー探しで何人ものフリーの相手とは

性行為している」。

「体の相性がいい相手は恋人になりやすいと言う
データが出るからな」

「だから慣れてるんだ……あっ、んっ、あぁっ♡」

「でも、今までで一番まれと相性がよさそうだ。

どんどん好きになってしまっているな。

ほら、オレの好感度を見てくれ」

「……ヴァン君……あんっ♡」



ヴァンがまれを気に入ってるのは本当らしい。
こちらからも好感度を確認してみたが、
時間が経つごとに上がっているのがわかる。
そしてまれも上がっている。好かれるのが
悪い気分じゃないのか、
それともヴァンの言うように気持ちが良い
性行為をしているからなのか……

81

73

「はあ……あつ、あつ、あんっ♡
身体が、変になりそうで……あんっ♡」

「受け入れた方がもっと気持ちよくなれるぞ」

「ち○ぽ気持ちいいって口に出して言ってみるといい」

「えっ、ち、ち……!?そ、そんなの……あんっ♡」

「ほら、こうやってお腹を押しながら上の方を刺激していくと」

「まつ、それす」……んっ、あつ、あつ、ああんっ♡」

「あつ、あつ、あつ、あああんっ♡おかひくなる……
ひっああんっ♡♡♡」

まれが大きな喘ぎ声をあげながらビクビクと震えた。
これは絶頂を迎えたと言っことなのだろうか。



「はあ……はあ……あああ……なに「れ……?」

「いったみたいだな。す「いち〇ほを締め付けてきたぞ」

「えっ……そ、そうなの……?」

「ああ、す「いい良い締め付けだった」

「はあ……はあ……そんな褒め方されても……」

「羞恥心があるのはわかるがな。

「気持ちよくなるには楽しむのが一番だぞ」

「楽しむ……うう……でも恥ずかしくて……」

「ううん、真実の愛のために頑張らないと……」

「羞恥心は理性が強いと強く感じるかもしれないな。

「このまま何度もイカせるか」

「あ、う、うん……あっ!」



ヴァンの腰が再び動き出した。
より感じさせようとしているのか、
お腹を押しながら胸も揉んでいる。

「胸もなんて……ひあっ、あっ、ああんっ♡」

「いったからか感度がいいな。
私も大分射精感が高まってきた。
このまま中出しさせてもらおうか」

「中は……んっ、あっ、あんっ♡あっ、ああんっ♡」

「低段位なら当然避妊はしてるだろう?」

「そう言えば……あっ、あんっ、あんっ♡
やっ、はげしっ……あっ、ああんっ♡」

「子宮も降りてきてるぞ。
孕ませられないのが残念だ!」

ヴァンがしっかりとまれの身体を抱えて抽送を激しくした。

丁寧な愛撫と絶頂ですっかり出来上がったまれは感じていようで喘ぎ声が大きくなっていく。

「あっ、あっ、あっ、ああああっ♡こんなっ、すっ♡ああっ♡」

「おかしくなっちやうっ♡あひっ、あっ、あっ、あっ、あああああ♡♡♡」

「すっいい締め付け具合がいいぞ。それにこんなに感じて、相性良すぎだ！」

「あっ、あっ、あんっ、あんっ、あんっ♡あんっ、あっ、きもちいっ、ああっ♡」

ヴァンは喘ぐまれを容赦なく追い詰めていく。

「あつ、ああああああ〜♡♡熱いのが……
入って……♡」

「良い締め付けた……出る……」

二人の結合部から白い液体があふれ出した。
どうやらヴァンが射精をしたらしい。
二人とも気持ちよさそうな顔で
ビクビクと震えているのが異様に腹がたつ。

「あつ……ああ……す……んんんっ♡」

「す……い……お……お……」




たっぷりと数十秒もの間震えていただろうか。
長い間射精をし、絶頂を迎えていたようだ。
二人してゆっくりと息を整えている様子が目に映る。

「はあ……はあ……どうだ、
初めて中出しされた感想は？」

「はあ……うん、何かすごいかった……
頭が真っ白などころに、
体の内側に注がれてる感じで……」





満足げな様子で余韻に浸ってるまれと目が合った。
やはり他の男との行為を見られるのは
後ろめたい気持ちがあるのだろう、
気まずげな表情になる。

しかし気まずくてもオレ達は愛を鍛えるために
続けると決めたのだ。
だからオレは……

「大丈夫だ、よく頑張ってくれたな」

「おお君……」

まれを励ますように笑いながらそう言った。
上手く笑顔が作れたかはわからないが……

「まれ……」

「えっ……んんっ！？」

ヴァンがまれに覆いかぶぎるとキスをし始めた。
更に腰も同時に動かし始める。

「ヴァン君！っんっ、ちゅっ、んんっ、んんっ♡」

驚くまれだったがいったばかりで力が入らないようだ。
そのままキスを抽送を受けて甘い声が漏れ始める。

「今はオレだけを見てろ」

「えっ……それって……ちゅっ、んむっ、んんっ♡」



ヴァンのまれに対する好感度は相当高いものになっている。



77

だから独占欲が出たと言うことなのだろうか。激しい腰の動きでまれを責め立てている。

87

「手を握って」

「うん……んっ、ちゅっ……♡」

ヴァンに促されてまれの手がヴァンの手を握る。恋人繋ぎだ。

そのまま両手を繋ぎ、キスをしながら抽送を続けていく。



「んんっ♡んむっ、ちゅむっ、んっ、んんっ♡
「はげひっ、んむっ♡んっ、んんっ♡」

「はあはあ……ほら、気持ちが良いだろ？」

「きもちいっ……んむっ、んんっ、んんっ♡」

激しい抽送とキスでまれの理性が
どンドン削られているようだ。
少しづつ目がとろんとしてきて、
更に抵抗するような動きもなくなっていく。

「はあ……はあ……ちゅっ……んっっ♡」



絶頂の鎮まったまれに対してヴァンはまだ濃厚なキスを続けていた。少しでも多くの快楽を与えようとしているように見える。

「んっっ……何でこんなに……激しく……んむっ♡」

「本気で寝取るつもりだと言った。それにまれの身体は気持ちが良いし、相性がいいな」

「何より可愛いぞ。抱いてるうちにもっと好きになった」

「えっ、か、可愛いって……んっっ♡」

「すっかり体は出来上がってるのは確認した。まだまだ続ける」

「まだまだって……あんっ♡やっ、また動いて……あっ、んむっ♡」

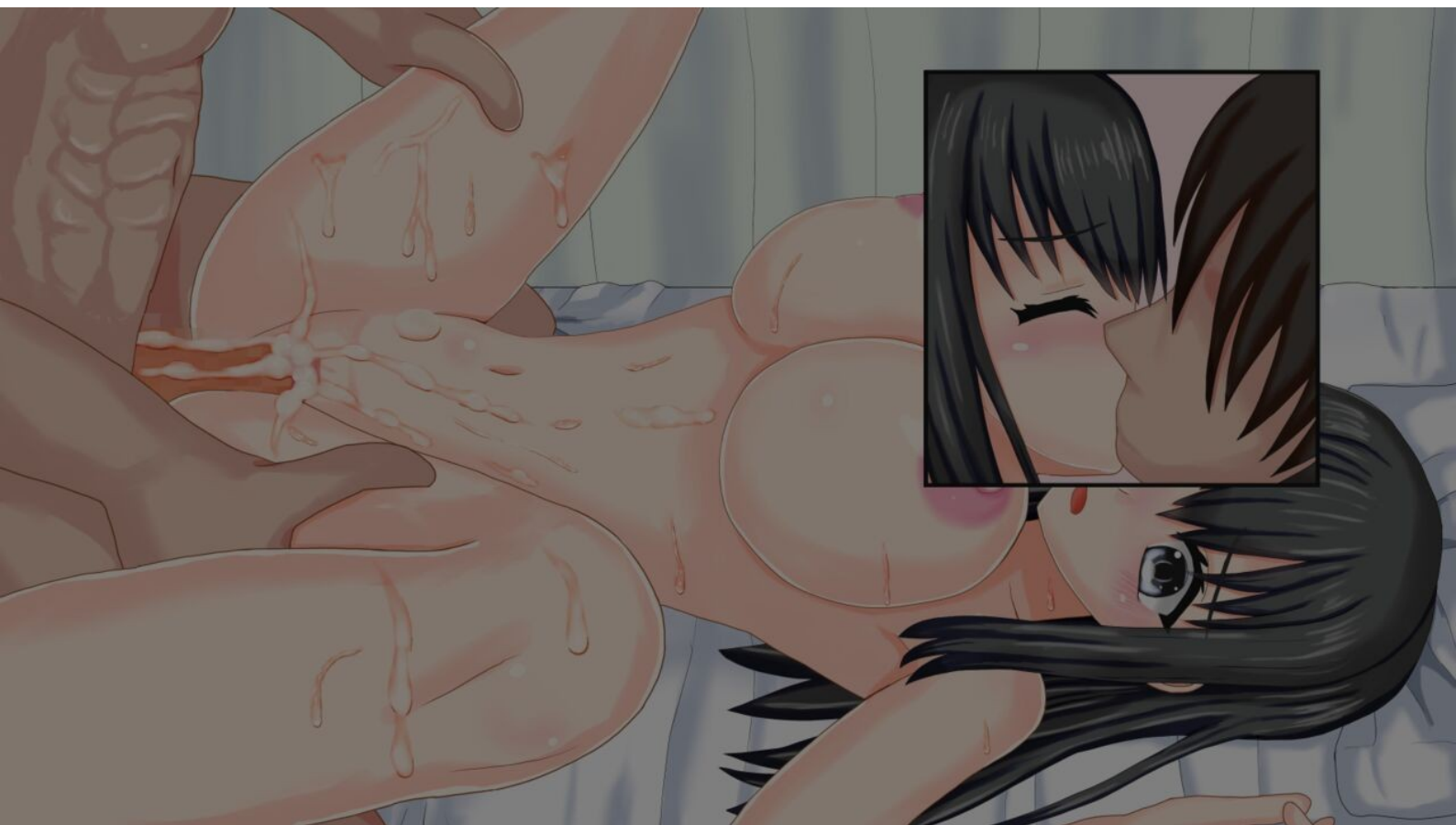
ヴァンはまた激しく腰を動かし始めた。
しかもキスも再開している。

「んむっ♡んんっ♡んんっ♡んむっっ♡」

「……」

オレはその様子を歯を食いしばって眺め続けた。









「あじ……あひっ♡あう、ああう……ああんっ♡♡

「ぐっぐっ……気持ちいいだろっ♡ち○ほが
気持ちいいだろっ。」

「きまをっっ……♡あう……あひんっ♡♡
「おち○ち○きまをっっ♡……あひんっ♡♡」



長時間休みなく交わった後、最後とばかりに
体勢を変えて交わり始めた。
まれはすっかり理性が削られたようで、
普段は言わないような淫語も言わされるようになった。
なってるし、こっちを見ても恥ずかしそうにしない。

「この体制だとち○ほが奥まで当たるからよち○ほを感じるだろ？」

「あぁっ♡……んん、奥……当たって……♡」

「すっ♡あぁっ♡あひっ♡……あぁっ♡♡」

「ほら、ち○ほが？」

「おち○ち○気持ちいい……♡あっ、あっ、あぁっ♡♡」

「……っ」

ほんの数センチ前で交わるまれを見るのは心に来るものがある。
ましてやまれの声は悦んでいて、表情も同様なのだ。



「ああ……ああああ……♡」

「ふっ……最終下校時刻だな。張り切りすぎたか」

「すっ……♡」

ぐったりとした様子でまれば倒れこんだ。
体に力が入らないようだ。

そんなまれをヴァンはお姫様抱っこで持ち上げて、
軽く口づけをした。

「最高の時間だった、まれ。またよろしく頼む」

「うん……♡」



まさしく二人の時間を言う光景に自らの
歯きしりの音が聞「えてくる。
しかし交わりはそれまでで、ウマンはまれを
寝かせると後始末を始めた。

「……」

ようやく終わった……どうも思いつくを見つめる、
自分のスポンが盛り上がっているのが見えた。

